興教大師覚鑁の真筆本について

松崎恵水

真言宗中興の祖である興教大師覚鑁（一〇九五―一一四三）の真筆とされるものは、長承二（一一三三）年、三十九歳の時に書かれた荘園を持明院真誉に譲つた添状や、保延四（一一三八）年、四十四歳の時に書かれた弟子兼海への伝授が畢つたことを証する書等がありますが、自筆の撰述としては、唯『真言浄菩提心私記』一巻が現存するのみであります。本書は、『浄菩提心私記』とも略称され、衆生本有の浄菩提心について真言密教的説明をなされたもので、古来御室仁和寺に秘蔵されて来たものであります。此の度真言宗御室派庶務部長射馬瑞泉先生の御好意で拝見する機会を得ましたので、これについて私見を加えてみたいと思います。

この書は、一巻の巻子本で、その包紙には、「不二上人筆真光院門跡重宝」とあり、その添書に、

此真言宗浄菩提心記一巻鑁上人真跡也
真光院相承之本云云為恐紛失此一合所加置之也
四巻之内云云
永正十六年正月廿八日

とあり、又端の裏書には著者と伝領者との名を記して、上方に正覚房、下方に行兼とあります。この行兼の伝歴不明のため、本書が何時から仁和寺に秘蔵されることになつたかは不明ですが、天和二（一六八二）年に開板されるまで、これを写した類本・写本が全く無いところからかなり厳重に秘蔵されて来たものと思われます。この真光院は、広仁の乱（一四六七）の兵禍により仁和寺の堂塔伽藍の殆どが焼失し、僅かに数個の子院を雙岡第二の丘の西の麓に移して法務を統理した時の所謂雙岡御所で、その後百五十余年間法務を執つたところですが、永正十六年は正にその期間内に当り、当時の門跡は大永七（一五二七）年、二十八歳で崩御された覚道法親王でありますので、『興教大師伝記史料全集』（史料）ではこの添書を覚道法親王の書とされています。（同書一一六八頁）このように厳重に秘蔵されて来た本書も、前述のように天和二年にいたつて謄写され、開板されたわけですが、その時の刊記

には、

斯一策也伝法院本願上人之所製而真門之青氈者也。然遺二逸秘釈之撰集一者何哉。想謂由二遷（往の古字）歳流世之少一焉。比適入二仁和寺之経庫一拝二閲上人親手之艸本一、蠹字頗多矣。以二余見ㄱ之恐二寝殲滅有ㄱ日也、故謄二得一本一迺還、雇レ工寿レ梓以謨下頒二遐方一及ㄱ終古上。於レ茲始覚二物之行蔵一誠繫レ運云、遂記為レ跋

天和二歳次壬戌仲夏日

とあります。この刊記は無署名ですので誰が謄写されたかわかりませんが、何れにしても経蔵に入り得る可能性をもつた者で、山内の僧か、高位の人物であつたと思われます。唯この刊記の天和二年という年号については問題があります。即ちこの刊記は、この『浄菩提心私記』が興教大師覚鑁の著作五十一部を集めた『密厳諸秘釈』に収載されていないことを指摘しておりますが、この『密厳諸秘釈』十巻の初版は豊山から刊行され、刊行年紀は不明ですが、天和二年より数年後の元禄年間（一六八八―一七〇三）に刊行されたとする説もあり、その再校本にいたつては智山第二十二世動潮によつて百二年後の天明三（一七八三）年に出され、豊山板の『密厳遺教録』もその一年前の天明二年に刊行されておりますので、何れも天和二年より後になり、年代的に合わないのであります。このことについて、二巻本の『興教大師全集』の編者である中野達慧氏は、或は享和二（一八〇二）年の間違いではないか（「密教研究」第三一号七八頁）といわれておりますが、エトが壬戌で一致しますので或はそうかも知れません。しかし、刊記が無署名のため断定することは出来ません。尚この板により明治二二年一月一三日護国寺より板行されたものが現流しております。

この『浄菩提心私記』の原本は、前述のように巻子本ですが軸は無く、天地二七・五センチ、全長八六八センチに亘る草稿本であります。最初の部分は丁寧に書かれ、辞句の修正が全然なされておりませんが、後になる程速書されたことが歴然としており、辞句の加除訂正が極めて多く、修正改竄の長い書き込みは行間に割り書きされ、又料紙の欄脚に横に書かれた箇所もあり、更に長文のため書き込む余白のない場合は四ヶ所に亘つて裏面に書かれております。この裏に書かれた部分について、天和板（或は享和板）には「御自筆の裏書に云く」と注意書きされておりますので、明治四十二年刊の一巻本の『興教大師全集』では、これを踏襲してすべて裏書として扱い、更に行間の辞句を傍注的に扱つております。しかし、これら裏に書かれた部分はすべて問答の所で、表の本文に○印やㄑ印が付されており、本来その箇所に挿入されるべきものを料紙の余白が無いため裏に書かれ、又は行間に書かれたもので、紙背に注記等を記した所謂裏書や、傍注でないことは明らかであります。その他文字の読み違いも見られま

す。殊に問答の中、問の文の末尾の耶の字は、草書のため読み違えてすべて于となつております。

昭和十年刊の二巻本の『興教大師全集』では、これを裏書とせずにすべて本文に入れられておりますが、しかし、左記のように六ヶ所に亘つて脱字があり、二ヶ所に誤字が見られます。（脱字の部分を○印で示す）

一、菩薩住〇此修学不二久勤苦一。（興教大師全集、上巻、二〇七頁五行目）

二、四種法身四種曼荼種種無量秘密曼荼一切総持心王。（興教大師全集、上巻、二一三頁五行目）

三、此究竟浄菩提心。（興教大師全集、上巻、二一三頁九行目）

四、一一皆是妙覚究竟如来本地法身。（興教大師全集、上巻、二二一頁八行目）

五、又此大日如来金剛之幻。（原文ではこの文重複、興教大師全集、上巻、二二一九頁三行目）

六、四種皆名二受用身一。（興教大師全集、上巻、二二一九頁六行目）

七、窮（原文）→究竟（興教大師全集、上巻、二一三頁一〇行目）

八、影像（原文）→影鏡（興教大師全集、上巻、二二四頁二行目）

本書を一見しますと、最初の部分は墨色も一定し、整然と書かれておりますが、前述のように中半から後の部分には十数ヶ所に及ぶ行間の割り書きや、六十数ヶ所に亘つて見せ消ちがあり、これらの文字は線も比較的太く、墨色も濃く書かれております。このため一見別人の筆蹟が加わつているのではないかと疑われますが、仔細に検討致しますと筆の入る角度がすべて一定し、同一人物の筆蹟であることがわかります。前にも述べましたようにこれは草稿本ですので、一気に書き上げられたものでなく、後から何度も筆を加えられたと思われ、線が比較的太く書かれた部分は、用筆が変つて新らしくなつたものと考えられます。

又、この真筆本は、二十一紙が張り合わされた所謂続紙で、最初の一紙は白紙で、最後の一紙に「伝法院本願之草自筆也」とありますが、これは後世付け加えられたものと思われます。この二一紙の張り合わせ方は前後不統一で、張り合わせて空白となつてしまつた文字の線の部分には墨を入れたようなところも見られ、裏打ちが施されている方の料紙の虫喰の箇所は裏紙でふさがつているところもあり、前述の天和板の刊記に「蠹字頗る多し」とあるところからしても、その後この保存のためにかなり手が加えられて来たことがわかります。

次に書法について簡単に申しますと、その筆蹟は全体にふところの広い所謂懐抱の文字で、文字が細字の割には大きく見え、草稿として自由に速書されたものでありますので、筆の廻転も軽妙で、練勁清雅な書風であり、弘法大師空海（七七四―八三五）の真筆とされる『金剛般若経開題』の筆意と類似しており、特に「若」の字や、「法身」、「衆生」等の文字

は全く相似しております。弘法大師を敬慕し、その教学の再興を念願した覚鑁ですので、弘法大師の書を学ばれたことは間違いないことと思われます。又、筆法の上からは、平安朝の三跡即ち小野道風（野跡、八九四―九六六）・藤原佐理（佐跡、九四四―九九八）・藤原行成（権跡、九七二―一〇二七）の影響が見られ、特に「是」の字は道風の『玉泉帖』のそれと全く相似しております。覚鑁はこれらの書も恐らく学ばれたものと思われますが、この問題については今後更に検討を加えていきたいと思います。

最後に、本書をその思想内容の上からみますと、先ず真言の浄菩提心とは、自性法身の心地法界、大日如来心王の具体であり、亦一切衆生の色心の実相、普門海会平等の種子であると説かれ、更に、一切衆生色心の実相、自然本有の心地の実際即ち一切智智であると述べて心智の一致を説き、又、この浄菩提心は真言行者入修の秘要、悉地成就速疾の妙薬であると述べ、真言行者にとつて本有の浄菩提心の開発が最も肝要であることを強調されております。そして、これらの所説の証文として、『大日経』や『大日経疏』、『菩提心論』『十住心論』等を引用し、要約せる大意を概説してから、二十三番の問答を設け、心即菩提、如実知自心、浄菩提心の分位差別、法報応三身の体同用異、所知障と無明、顕教の一乗と密教の一乗の差別等について顕密の諸経論を引用して所説を徹底されております。

前述のように、料紙の裏に書かれているのはすべてこの問答段の文でありますので、恐らく論を進めていく上において後から気がつかれて加えられたものと考えられます。尚、これらの問答の中、最後の顕密一乗の差別についての問答のところで「一一の釈文下に至つて具さに之を引くべし」と言われながら、これらの釈文が見られず、前述の添状の「四巻之内云云」の記事より考えても、本書は未定稿本か、或は後の部分が散逸し失われてしまつたのではないかと思われます。

何れにしても、本書は、覚鑁の二百十余部に亘る著作の中の唯一の真筆本として極めて貴重なものであり、しかも率意の書であるところから直接興教大師覚鑁の人格に接する思いがし、真言教学研究の上からはもとより、弘法大師空海の書の研究に比して、従来殆ど研究されなかつた興教大師覚鑁の書の研究の上に不可欠のものとして重要なる位置を占めるものと考えられますので、今後更に検討を加えていきたいと思います。